

## ピノッキオの冒険



コロデイ

コッローディ 作  
杉浦明平 訳  
岩波書店

泣いたり笑ったりするとても不思議な木ぎれから、ジェッペットじいさんは、人形を作りました。その人形にピノッキオと名前をつけて、とてもかわいがっていました。ピノッキオはいたずら好きで、ものをいうコオロギの忠告もまったく聞こうとしません。やがてピノッキオは、キツネとネコにだまされて旅に出ます。そして、いろいろなゆうわくや危険と出会うことになるのです。

## 百まいのドレス



エステス

エレナー・エステス 作  
石井桃子 訳  
ルイス・スロボドキン 絵  
岩波書店

ワンダ・ペトロンスキーは、クラスメイトの女の子たちに「ドレスを何まい持っているの?」と聞かれると、きまって「百まい。」と答えます。それを聞くと、女の子たちは、ワンダのことをかかいます。それは、家がまずしくていつも同じ服を着ているワンダが、百まいのドレスを持っているなんてうそにきまっているからです。ワンダは、どうして百まいのドレスを持っていると言ったのでしょうか。

## びりっかすの神さま



オカタ

岡田淳 作 絵  
偕成社

9月になって1週間が過ぎたころ、始は4年1組に転校してきました。始はこの教室で、いままでだれも見なかったものを見ます。それは、20センチくらいの大きさのすきとおった男。くたびれた背広を着て、よれよれのネクタイをしています。背なかには小さなつばさがあり、空中を飛んでいました。テストの時、かけっこの時、給食の時……びりになると、「びりっかす」と名のるその男が見えるのです。

## ファーガス・クレインと空飛ぶ鉄の馬



ステュワート

ポール・ステュワート 作  
クリス・リデル 絵  
唐沢則幸 訳  
ポプラ社

貧しいながらも、お母さんとふたりでせいっぱい生きているやさしい少年ファーガス・クレイン。ファーガスのところには、このところ空飛ぶ箱が毎晩届きます。中に入っているT・Cという人の手紙に、ファーガスは胸騒ぎをおぼえるのです。この手紙を手がかりに、行方不明の父や学校船「ベティ・ジーン号」の秘密にせまり、連れ去られた友だちを救う冒険の旅に出ます。空飛ぶ鉄の馬に乗って。

## ちょっとひとやすみ⑤

外国の物語が日本で出版されるとき、元の言語から日本語にかえる必要があります。この作業を翻訳といいます。翻訳は、外国語をただ日本語に置きかえるだけではありません。物語のふんいきをこわさないよう、もっともびったりくる言葉を選ぶようにしなくてはなりません。すぐれた翻訳者は、その作品が日本の読者に愛されるよう、細かなところまで心を配っているのです。古典と言われる作品や長く読みつがれた作品は、いくつかの翻訳で出版されていることがあります。同じ作品でも、翻訳が変われば、味わいも変わるでしょう。読み比べしてみるのも、読書の楽しみのひとつです。



## ふたりのロッテ



ケストナー

エーリヒ・ケストナー 作  
池田香代子 訳  
岩波書店

女の子が夏休みをすごす「子どもの家」で、ふたりは出会いました。ウィーンからやってきたルイーゼ・パルフィーと、ミュンヘンからやってきたロッテ・ケルナー。なんと、ふたりはうりふたつ。実は、わけあって別々に育てられたふたごだったのです。夏休みも終わり、ふたりは家に帰る汽車に乗り込みます。ルイーゼはミュンヘン行きの、ロッテはウィーン行きの汽車に。ふたりはそれぞれの生活を入れかえることにしたのです。

## ぼっぺん先生の日曜日



フナサキ

舟崎克彦 著  
筑摩書房

ぼっぺん先生は38歳。独身の生物学助教授です。ある日、先生は、本の大整理をはじめます。山のような本のなかには、子どものころに読んだ「なぞなぞのほん」もありました。ふと気づいたら、先生は「なぞなぞのほん」の中にいました。もとの世界にもどるためには、なぞなぞをすべて解かなくてはならないようです。ところがそのなぞなぞは、うさぐさくさくへんテコなものばかり。さて、先生はもとの世界へもどれるのでしょうか。